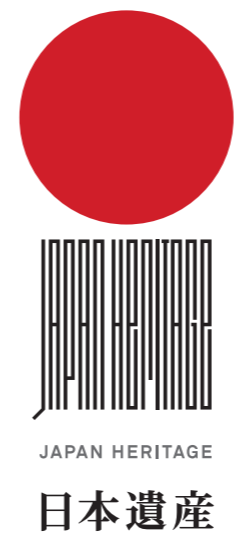




日本遺産 (Japan Heritage) とは

地域に点在するさまざまな文化財をつなぎあわせ、日本の文化や伝統を物語る「ストーリー」を認定するもので、文化庁が平成27年度に創設した制度です。日本遺産は、これまでの文化財指定の制度とは異なり、文化財そのものが認定の対象ではなく、地域の文化財と伝統や風習を結びつけたストーリーを認定し、地域の観光をはじめとした産業の振興を図ることで、地域の活性化につなげるのが目的です。



祝！越前町が日本遺産の町に認定！

4月28日、越前町を含む6市町（越前町、愛知県瀬戸市、愛知県常滑市、滋賀県甲賀市、兵庫県篠山市、岡山県備前市）で構成された日本六古窯にまつわるストーリー「きつと恋する六古窯—日本生まれ日本育ちのやきもの産地—」が日本遺産として認定されました。

「きつと恋する六古窯—日本生まれ日本育ちのやきもの産地—」

日本遺産に認定されたストーリーをご紹介します。ストーリー中に構成される文化財は、6市町で55を数え、そのうち越前町は11の文化財が認定されています。

ストーリーの概要

中世から今も連続とやきものづくりが続く六古窯のまちは、丘陵地に残る大小様々の窯跡や工房へ続く細い坂道が迷路のように入り組んでいます。恋しい人を探すように煙突の煙を目印に陶片や窯道具を利用した堀沿いに進めば、「わび・さび」の世界へと自然と誘い込まれ、時空を超えてセピア調の日本の原風景に出会うことができます。六古窯のまちを訪れた人々は、そんなところに「きつと恋する」ことでしょう。



越前焼



剣神社本殿
県有形文化財

六古窯とは

「日本六古窯」という言葉は、日本を代表する古陶磁研究者である小山富士夫氏により命名されました。昭和初期までに、中世窯として確認されていたものは、瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前の五産地で、それ以外に中世窯は存在しないと言われていましたが、越前の存在が戦後（昭和23年）の調査で明らかとなったため、先の五産地に加えたものが六古窯と呼ばれるようになりました。その後、研究が進んでいったことにより、この六古窯以外にも、日本各地に中世窯の存在が明らかになるとともに、この六古窯よりも当時盛んに操業していた産地の実態も明らかになっていったことで、中世窯は六古窯という構図は崩れてしまいました。全国各地の中世窯は、15世紀末になると瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前・越前に集約されていき、現在までその生産が続けられてきたのがこの六産地となっています。現在では、中世を代表する窯で、これまで途絶えることなくやきもの生産が行われている産地という意味で「日本六古窯」という言葉が使われています。



陶芸越前大がめ捻じたて成形技法 県無形文化財



平安時代より現代に伝わる、越前焼大甕の成形技法。

神明ヶ谷須恵器窯跡 県史跡



越前焼以前の須恵器生産の実態を示す遺跡。

越前南窯



燃料の薪不足に悩んだ瀬戸の本業窯の窯元が苦心して完成させたという幻の登り窯。

北釜屋甕墓 町史跡



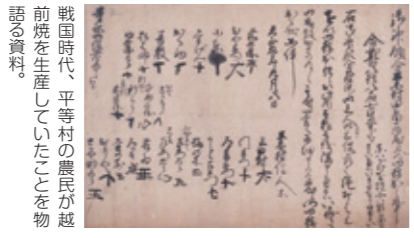
越前焼生産に従事していた職人の墳墓。甕を墓標とするなど、全国でも希有な事例。

三筋壺 町有形文化財



平安時代後期の蔵骨器。越前窯のルーツが常滑窯に求められることを明らかにした資料。

剣神社文書 県有形文化財



戦国時代、平等村の農民が越前焼を生産していたことを物語る資料。

越前赤瓦



日本三大瓦のひとつ。平等区を中心に生産され、福井城・金沢城などにも供給された。

越前窯跡群 町史跡



町内に200基以上ある、中世・近世の越前焼生産の実態を示す遺跡。

日本遺産認定を地域の力に！

日本遺産の認定は、越前焼産地としての地域活性化の起爆剤として期待されます。今後は、日本遺産のブランドを活かした越前焼の国内外への情報発信と、地域住民、民間事業者、行政が一体となった町づくりを目指します。



越前瓦

問合せ先 商工観光課 34-8720